

39 オックスフォード英語辞典

『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*) は、イギリスのオックスフォード大学出版局 (Oxford University Press) が刊行する記述的英語辞典である。語形や語義の変遷を、用例文の提示によって明らかにする。全20巻の第2版には300,000余の親見出し語があり、その下に2,437,000以上の用例文が挙げられている (Berg 1993: 195)。

1844年に言語学協会 (Philological Society) に於いて Richard Chenevix Trench, Herbert Coleridge, Frederick Furnivall によって新たな辞書を編纂する計画が持ち上がり、1857年に編纂が開始されるものの、度々中断した。1870年代に James Murray (1837-1915) が編集主幹に就任し、1878年にオックスフォード大学出版局と出版の合意を取り付け、翌年に契約するに至る。1884年になってようやく小分冊としての発行が始まった。編纂作業は *A New English Dictionary on Historical Principles* (NED) の表題の下で続けられ、1895年に非公式の合冊本が発行されたが、公式に全10巻の完成版が出版されるのは1928年のことである。この間、Murrayの他、Henry Bradley, William Craigie, Charles Talbut Onions が編纂に携わっている。1933年に全12巻の *The Oxford English Dictionary* (OED) として再販され、この時に辞典の表題がOEDに統一された。この再販にあたって1巻の補遺が追加され (First Supplement), 1972年から1986年にかけて4巻の補遺が *A Supplement to the Oxford English Dictionary* として出版されている (Second Supplement)。このSecond Supplementの編纂は Robert Burchfield が担当した。

旧版と2度に亘る補遺、その他の新たな事項を合わせた第2版が1989年に出版された。これが今、私たちが親しんでいる全20巻のOEDである。1992年にはCD-ROM版が出されている。第2版の編纂には Timothy J. Benbow, John A. Simpson, Edmund S. C. Weiner の3名が中心的な役割を果たした。その後、3巻の新補遺 *Additions Series* (第1・2巻が1993年刊、第3巻が1997年刊) が出されているが、*Oxford English Dictionary Online* が2000年に始まったことに伴い、新補遺の出版は停止している。代わりに、3ヶ月毎にオンライン版のアップデートが行われている。新補遺及びオンライン改訂原稿の公開は、現在進行中の第3版に向けての改訂作業の一環であるとされるが、書籍版としての出版はされないものと見込まれている (Flanagan 2014; Jamieson 2010)。2018年には、改訂作業の約半分が完了したとされる (Dickson 2018)。第3版に向けての編集主幹は John A. Simpson であったが、2013年に Michael Proffitt に交替した。

OED の編纂史については、Gilliver (2016), Mugglestone (2000, 2005), Murray (1977), Winchester (1998, 2003) などに詳しい。また、OED ウェブサイトにも多くの情報が掲載されている。

OED は「歴史的原理」(historical principles) に則って編纂された辞典である。単語の歴史的発展を示すことにより、その説明をしているのである。語義の配列も、最近の一般的な学習者辞書のように頻度などに依るのではなく、語義の古いものから順に並べられている。各語義は、用例文によって裏付けられる。それぞれの用例文は、出版年とともに提示され、実際の文献中に使われているものからの引用である。その語義に関わる用例の中で最も古いものを提示し、その後の用例も年代順に並べ、現在使われない語義については記録上最後に使われた（と編集者が承知している）用例までを示す。その語が、どの時代にどのように使われていたのかを知ることができる。また、同様に語形とその変遷についても詳細に示し、記事冒頭には英語になるまでの経緯（語源）も掲げられている。世界の様々な英語文献に現れた「英単語」について、その歴史を包括的に記述した巨大資料なのである。百科事典ではないので、固有名詞は採録しないのが原則であるが、派生的な意味が生じている場合は採録されている。

OED のもう一つ特筆すべき特徴は、その編集が多くのボランティアに支えられてきたことである。今でこそウェブ検索により多くの例文が集められるようになったが、つい最近まで用例文の収集はボランティアに頼っていたのである。この **Reading Programme** と呼ばれる企画は現在でも続けられており、広く一般から新たに収録すべき語句や語義、用例文の提供を受けている。現在では OED ウェブサイトの専用ページから提供することができるが、以前は紙切れに書いたものをオックスフォード大学出版局まで郵送したものである。本項目の執筆者も、博士論文執筆時に遭遇した珍しい語などを集めて、イギリスの出版局本部に向けて小包を発送した経験を持つ。大きな貢献を為した **William Chester Minor** (1834-1920) が妄想性障害を持っていたということは辞書関係者の中では有名な事実であったが、Winchester (1998) やそれを原作とした 2019 年制作の映画でさらに広く知られるところとなった。

(土居 峻)